西町・谷津遺跡

—都市計画街路下の尻・茶屋町線取付道路
建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1990

群馬県安中市教育委員会
群馬県安中市建設部

西町・谷津遺跡

—都市計画街路下の尻・茶屋町線取付道路
建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1990

群馬県安中市教育委員会
群馬県安中市建設部

西町・谷津遺跡　　正誤表

頁	行	誤	正
例 言	23行	通り	とおり
P．1	16行	平行	並行
P．2	9行	忠政は武田氏に	忠成は武田氏に

安 中 城 全 景

序

安中市は群馬県西毛地域のほぼ中心に位置します。市の中央には、西から東へ碓氷川が流れ、川に沿って緑豊かな田園風景が広がっています。また古くは東山道が通り、江戸時代には中山道、そして現在は国道18号線と交通の要として栄えてまいりました。

このたび、安中城西門跡の南側に街路を建設することとなりましたが、安中城跡は、市にとって非常に重要な遺跡であることから、発掘調査を実施して記録保存してゆくことになりました。

今回の発掘によって、西門の南から谷津に向かって堀があることがわかりました。またその堀を一度埋めて、石垣を築き水路を作っていたこともわかり、安中城の構造に新たな１ページを加えることができました。

こうした、埋蔵文化財はかけがえのない郷土の遺産であります。市民の皆様にも郷土の歴史を学習していただけるよう、社会教育、学校教育の場で広く活用を図り、文化財愛護の精神を広く普及するよう努めてゆく所存であります。

終わりに、発掘調査にご協力していただいた地元の皆様には厚くお礼申し上げたいと思います。

平成２年３月

安中市教育委員会

教育長　佐　藤　三木岩

例　　言

1．本書は安中市（建設部都市施設課）が行う街路下の尻茶屋町線取付道路建設事業に伴う西町・谷津遺跡（略称D－2）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は平成元年5月8日より5月18日までの間実施し、遺物整理は発掘調査終了後平成2年2月23日までの間断続的に実施した。

3．調査主体は安中市教育委員会であり、調査は社会教育課社会教育係千田茂雄が担当し、遺構写真及び遺物写真の撮影、本書の執筆、編集も千田茂雄が行った。

4．遺物の実測、トレース、拓本は千田、金井京子、中川京子、和田宏子、上原秀樹が行った。

5．本調査における記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

6．発掘調査組織

安中市教育委員会事務局		安中市建設部	
社会教育部長	上原満雄	建設部長	上原正司
社会教育課長	茂木勝文	都市施設課長	反町良一
社会教育係長	伊藤惣一	事業係長	小嶋六郎
主査（社教主事）	森泉寿義雄	技師	萩原　弘
主査	松本　豊		
主事（社教主事）	田中秀雄		
主事	大工原豊		
主事（担当）	千田茂雄		

7．調査に当たり地元の方々に様々な面で御協力いただきました。厚くお礼申し上げます。

8．調査より報告書作成に至るまで、次の方に御指導、御助言いただいた。深く感謝いたします。（敬称略）

神戸聖語

9．発掘調査及び遺物整理従事者は次の通りである。（敬称略）

井上慎也（立正大学学生）　上原和夫　上原秀樹（東北学院大学学生）　大塚スエ子　金井京子　金井武司　設楽重男　下マスエ　神宮幸四郎　鈴木八郎　田村旬平　中川京子　山崎連次郎　和田宏子

目　　次

序

例　　言

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　調査の経過…… 1

Ⅲ　調査の方法…… 1

Ⅳ　遺跡の地理的・歴史的環境…… 2

Ⅴ　遺構と遺物…… 5

1　A区の遺構と遺物 …… 5

2　B区の遺構と遺物 ……11

Ⅵ　ま　と　め ……14

I　調査に至る経過

平成元年３月、安中市建設部都市施設課より安中市教育委員会へ都市計画街路下の尻・茶屋町線取付道路建設事業に係る照会があった。しかし該当地域は安中城西門の南に隣接しており、埋蔵文化財の存在する可能性が非常に高いため、市都市施設課と市教育委員会の間で協議を行った。しかし路線を変えても遺跡を回避することが不可能であることから、事業実施に先立ち、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることになった。

II　調査の経過

発掘調査は平成元年５月８日より５月18日までの約10日間にわたって実施した。

３叉路の道路の調査のため調査区をＡ区、Ｂ区の２つの区に分け調査を行った。

発掘調査はまず、Ａ区、Ｂ区共にバックホーにより表土を掘削し、その後人力により進め、遺構確認、精査を行った。確認された遺構は精査を行い、測量、写真撮影を行った。測量については遺構平面図、土層断面図、コンタ図の作成を行った。しかしＡ区の堀の部分に関しては、途中で西壁が崩落するという事故が起こり、堀全面を掘り下げることが危険なために、部分的に堀の底面までトレンチを開ける方法で対応した。

遺物整理は平成２年２月１日から２月23日までの間実施した。

方法は、遺物の水洗・注記→実測・拓本→トレースの順で行い、平行して遺構図面の整理・素図作成、トレース、写真整理を行った。

III　調査の方法

直線の南北道路東側幅杭のラインを基線として、東西の道路との交差点北側をＥ－４となるようにグリッドを設定した。また、１グリッドは４ｍ×４ｍで北西隅を基点とし、北から南へＡ、Ｂ、Ｃ…西から東へ１、２、３…と呼称するようにした。

Ⅳ　遺跡の地理的・歴史的環境

西町・谷津遺跡は安中市安中２丁目字西町、３丁目字谷津に所在する。安中地区は安中市のほぼ中央に位置し、碓氷川と九十九川に挟まれた碓氷川中位段丘上に位置する。西町・谷津遺跡はこの段丘の東端近くの安中城西門跡南側に位置する。

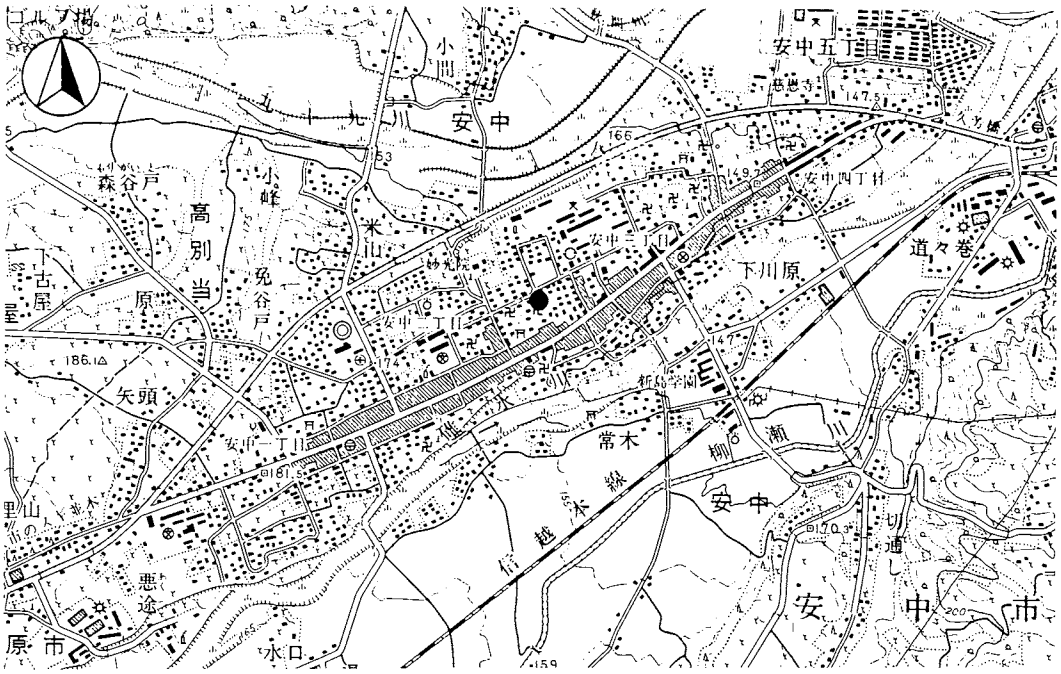
山崎一氏等の研究によれば安中城は、永禄２年安中忠政の築城と言われている。かつて安中城一帯は野尻といい、そこへ永禄２年４月安中越前守忠政が原市の榎下城よりやってきて在地の豪族窪庭図書に代地を与え退け、ここに城を構え、自らの名前をとって野尻を安中と改名した。忠政はその子忠成を安中城主として、自らは松井田城にあって、親子ともども武田氏の勢力に抗したがついに忠政は戦死、忠政は武田氏に降って臣となった。そして天正３年長篠の戦いに於て一族全滅したという。安中氏滅亡後一担は廃城となったが、江戸時代に井伊直勝によって再興されたが、井伊氏２代、水野氏２代、堀田氏１代、板倉氏２代、内藤氏３代と相つぎ、寛延２年から再び板倉氏の城となり、６代を経て明治６年には廃された。城は安中氏時代の城の一部で陣屋構えのものであった。

城跡の規模は東北－西南、650m、幅350m、西北面は九十九川の断崖で高さ20mにも及び、東北面、東南面も10m以上の急斜面で城外にのぞむ。西南面だけは平地続きで、そこを掘りきっている。堀切は西南部が失われてしまったが、長さ300m、北よりに虎口跡があり、北側に「折」が構えられている。この虎口を入ったところが３の丸で、東南面から東北面まで回っているが、東北部は堀によって別郭となる。東北面には腰曲輪様の部分もあり中央に筋違いの虎口があった。

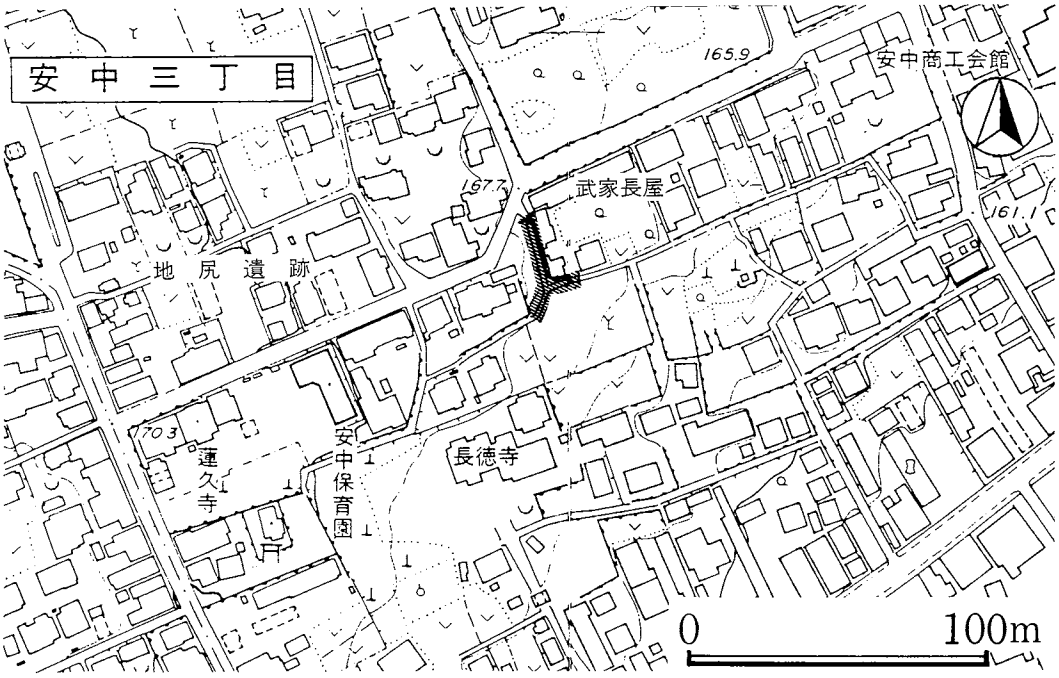
内郭は３郭に分かれ、東北から西南に並ぶ、東北は端の郭は太郎兵衛屋敷と呼び、東西150m、南北100m、西面は急崖、北面には腰曲輪がつく。南面の堀には東よりに「折」があり、東面の谷地は自然の壕で、２の丸堀に続く。中央の郭は東西220m、南北180m、東面と西南部、西面に虎口があり、北面にも太郎兵衛屋敷への通路がある。西の郭は、後の安中城本郭となっていたところで東西、南北とも200mあり、東北面は屏風折、東南面は雁木折になっていた。

江戸時代にはこの内部が中仕切りによって南北に３分され、北が御殿、南が倉屋敷、中部は東南、西の両虎口を受け、御殿及び倉屋敷へはここから入ったらしい。御殿北面には坂下門があった。

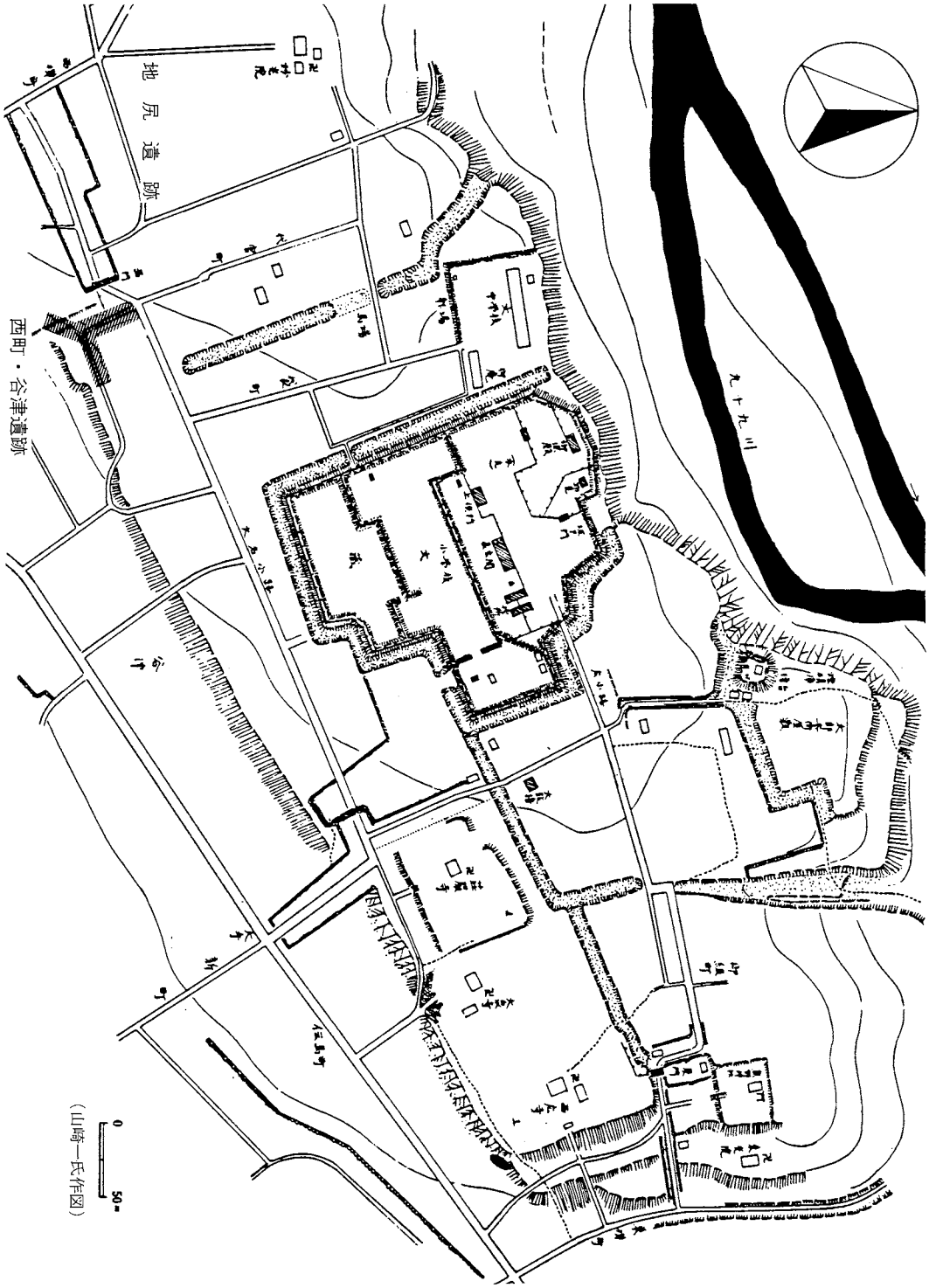
大手門、西門、東門はそれぞれ安中氏時代の３の丸外側につき、その内部は武家屋敷になっていた。各門には前に、陣屋構え特有の長い枡形がついている。現在武家屋敷は保存のため、改修工事中である。



第１図　遺跡位置図（１：2500）



第２図　調査区位置図（１：2500）



第３図　調査区位置図

V　遺構と遺物

1　A区の遺構と遺物

遺　構

A区からは堀が検出された。調査区の関係上堀の東側半分のみの調査となった。

この堀は確認面までが深く、調査中に壁が崩れ落ちるという事故が数回発生した。そのため調査区内の堀全体を発掘調査するには危険が伴うため、やむおえず堀に対し横方向に、トレンチを設定し調査を実施することにした。

堀の規模は、上端部幅推定７m、下端部幅推定２m、深さ約２mで北西方向に走っている。堀の底面部分は２段に掘り込まれている。

覆土は、３層から下の層にAs―YPの混入が多くなり、人為的に埋め戻された様相を示している。また、ラミナ状の堆積状態が確認されなかったことから、この堀はその当時空堀であった可能性が高いと考えられる。

この他、堀の南下の部分で石垣が南北に並んで確認された。

この石垣は高さが約50cmで、堀の方向より多少斜めにずれているが南北に走っている。石垣部分の堀の堆積状態を観察すると１度堀を埋めて、その上に石垣を積んでいる状態がわかる。つぎに石垣の覆土を見ると砂質層がラミナ状に堆積していることから、水が流れていたことがわかる。つまり、ある段階で堀を埋めて、石を積み水路を作ったものと考えられる。

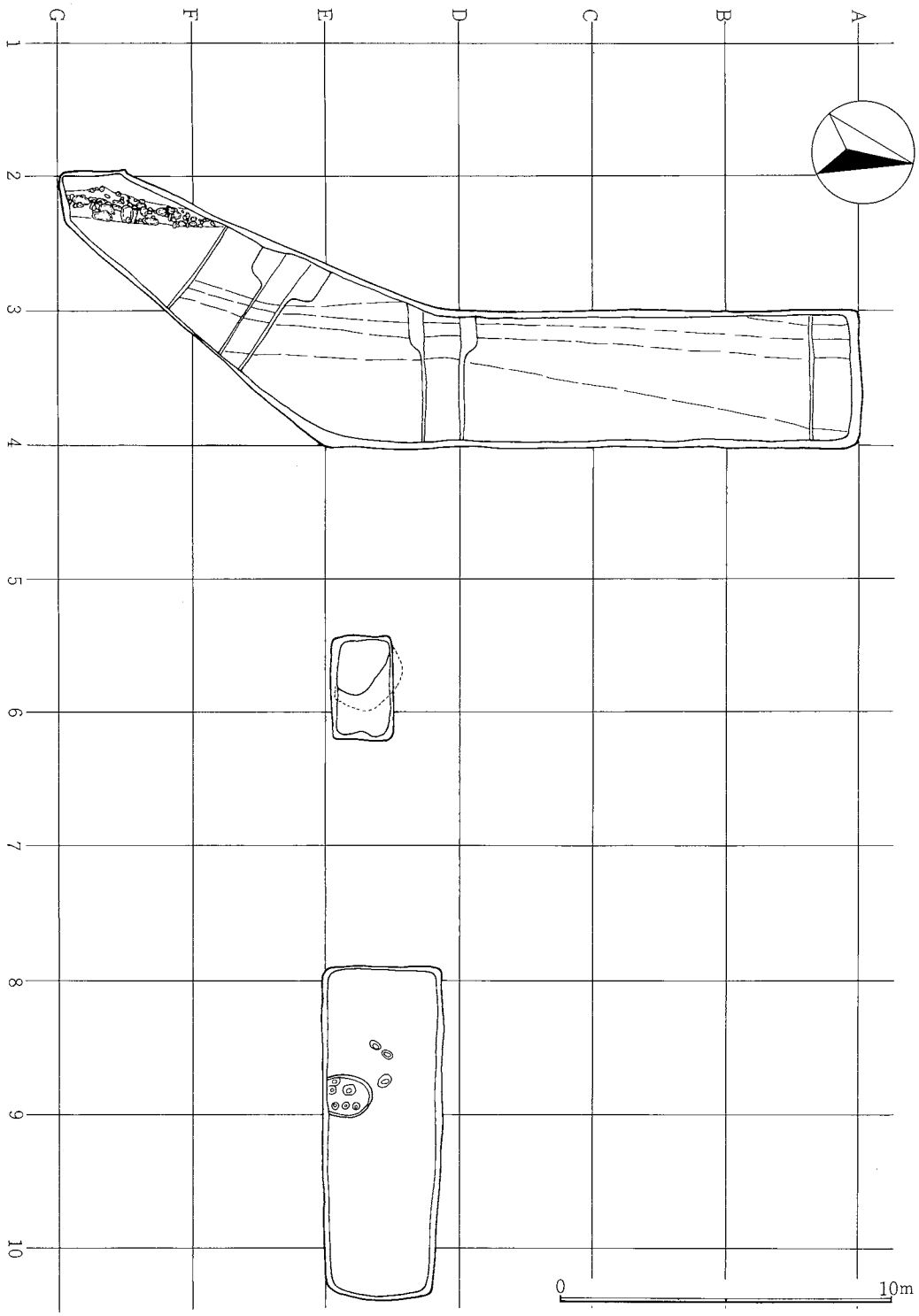
この石垣の調査中にも、すぐ南側の壁が崩落する事故があり、覆土の堆積状態、石垣の覆土堆積状態の図面を取ることができなかった。

遺　物

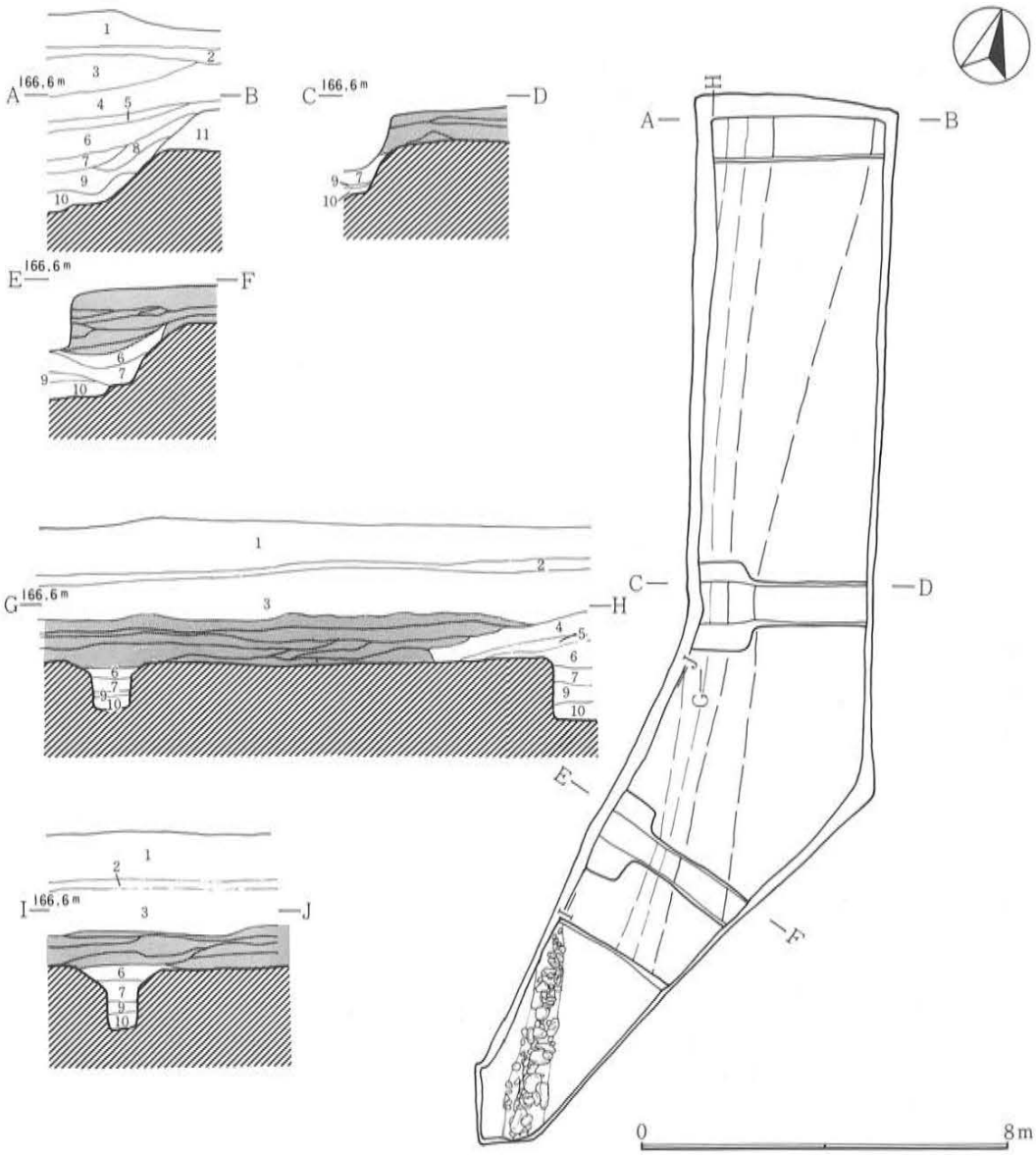
調査区全体を掘り下げられなかったこともあるが、非常に遺物の出土は少なかった。

いずれの遺物も、覆土中～下層にかけて（５層～９層）As―YPが多量に含まれる、人為的に埋め戻されたと思われる層から出土している。

出土遺物は、縄文時代の土器が数点、内耳土器が１点出土したのみである。いずれの遺物も、堀を埋め戻したときに混入したものであろう。この堀の存在した時期を決定ずけるような遺物は全く検出できなかった。



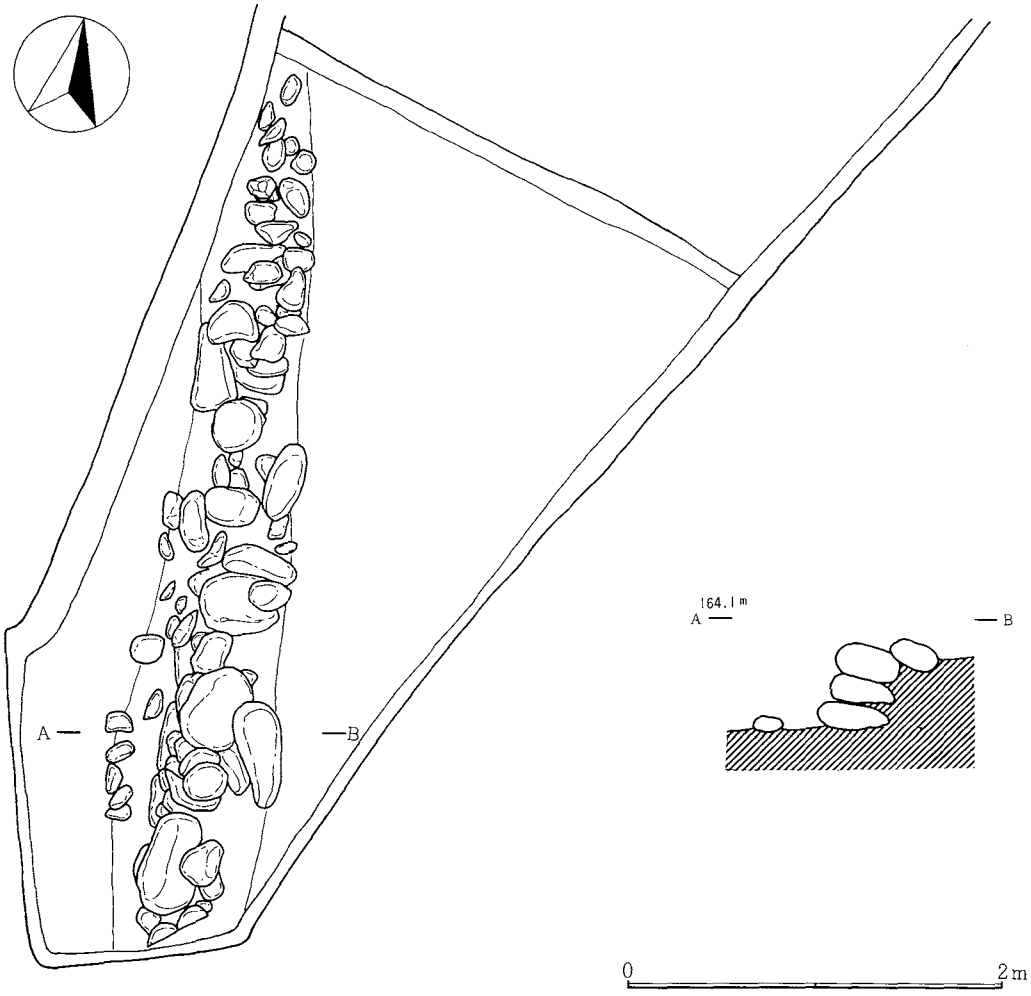
第４図　西町・谷津遺跡調査区全体図



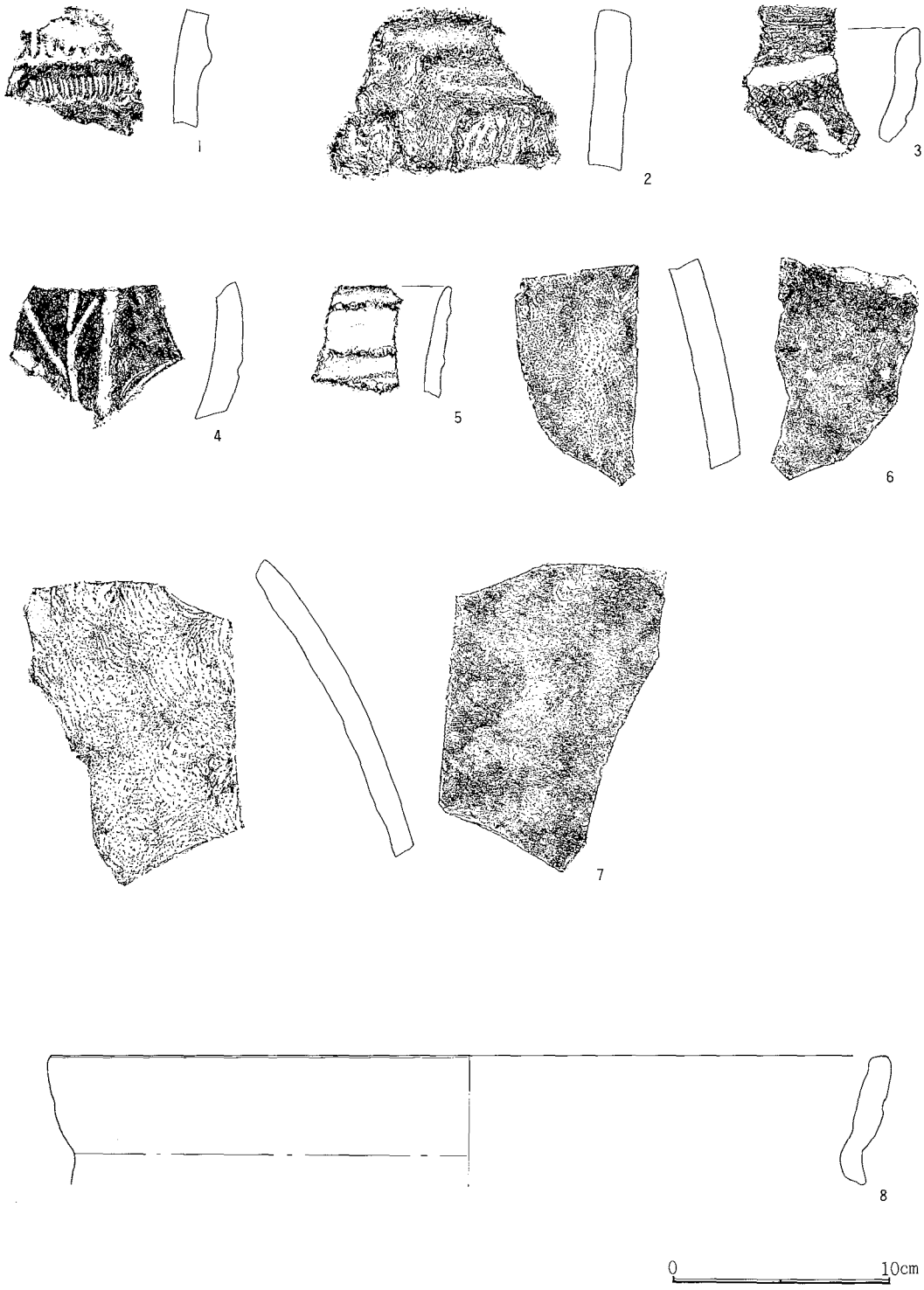
	色調	粘性	しまり	混入物等
1．黒褐色土層		なし	なし	As－A多量
2．灰褐色軽石層		なし	なし	As－B純層
3．黒褐色土層		あまりない	あまりない	As－YP少量
4．黒褐色土層	3より明るい	あまりない	あまりない	As－YP多量
5．暗褐色土層		ややあり	ややあり	As－YP多量
6．暗褐色土層	5より明るい	ややあり	ややあり	As－YP多量
7．黄褐色土層		ややあり	ややあり	As－YP多量、ロームブロック少量
8．暗黄褐色土層		ややあり	ややあり	As－YP、ロームブロック多量
9．暗黄褐色土層		ややあり	あり	As－YP、ロームブロック少量
10．黒色土層		あまりない	あり	
11．黄色軽石層		あまりない	なし	As－YP純層

As－YPを多量に含む埋め土

第5図　A区全体図



第６図　石垣積み水路実測図



第７図　Ａ区出土の遺物

No.	器　種	部　位	文　　様　　等	胎　　土	焼　成	色　調	時　　期
1	深　鉢	胴　部	隆帯が横位に施され、隆帯に沿って爪形文、蓮花文が描かれる。	粗砂粒	あまり良くない	褐色	縄文時代中期　勝坂式
2	深　鉢	胴　部	隆帯により縦横に区画され、隆帯に沿って蓮花文が描かれる。	粗砂粒	良くない	褐色	縄文時代中期　勝坂式
3	深　鉢	口縁部	口唇部下に沈線が横位に施され文様帯を区画し、その中に単節斜縄文が施文される。	砂粒	良好	暗褐色	縄文中期　加曽利E式
4	深　鉢	胴　部	沈線により文様が描かれる。	砂粒	良好	暗褐色	縄文後期
5	深　鉢	口縁部	口唇部下に刻みをもつ2本の沈線を横位に施す。	砂粒	あまり良くない	暗褐色	縄文時代後期堀之内式

No.	器　種	調　　整　　技　　法	胎　　土	色　調	残　　存	備　考
1	須恵器　甕	外面：胴部回転横ナデ。 内面：胴部同心円状のタタキ目。	緻密	灰色 灰褐色	同部一部	
2	須恵器　甕	外面：胴部タタキ目を半スリケシしている。 内面：胴部同心円状のタタキ目。	緻密	灰色 灰褐色	同部一部	
3	内　耳	外面内面共に回転横ナデ。	砂粒を少量含むが緻密	暗灰色	口縁部一部	硬質陶器

第1表　A区遺物観察表

2　B区の遺構と遺物

遺　構

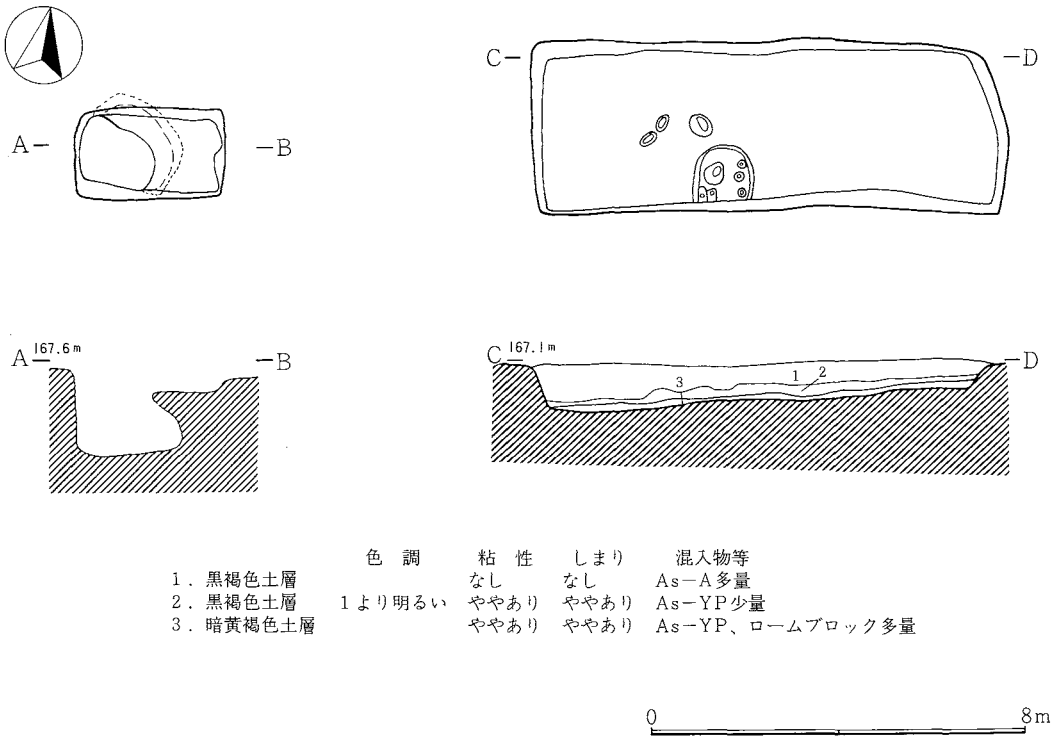
B区では、袋状の土壙と、ピットが数基検出された。

袋状土壙は平面形が隅丸方形で、北東側が袋状にオーバーハングしている。南西側は上場からほぼ垂直に下場まで落ちている。規模は上場が長径160cm、短径120cm、中場が長径220cm、短径200cm、底径が長径208cm、短径180cmである。覆土は、As—YPを多量に含んでいる土で、一度に埋め戻された様相を示してる。

ピットは数基検出されたが、掘り込みが浅く規則的に並ぶわけでもなく、遺物も出土しないことから時期及び性格は不明である。

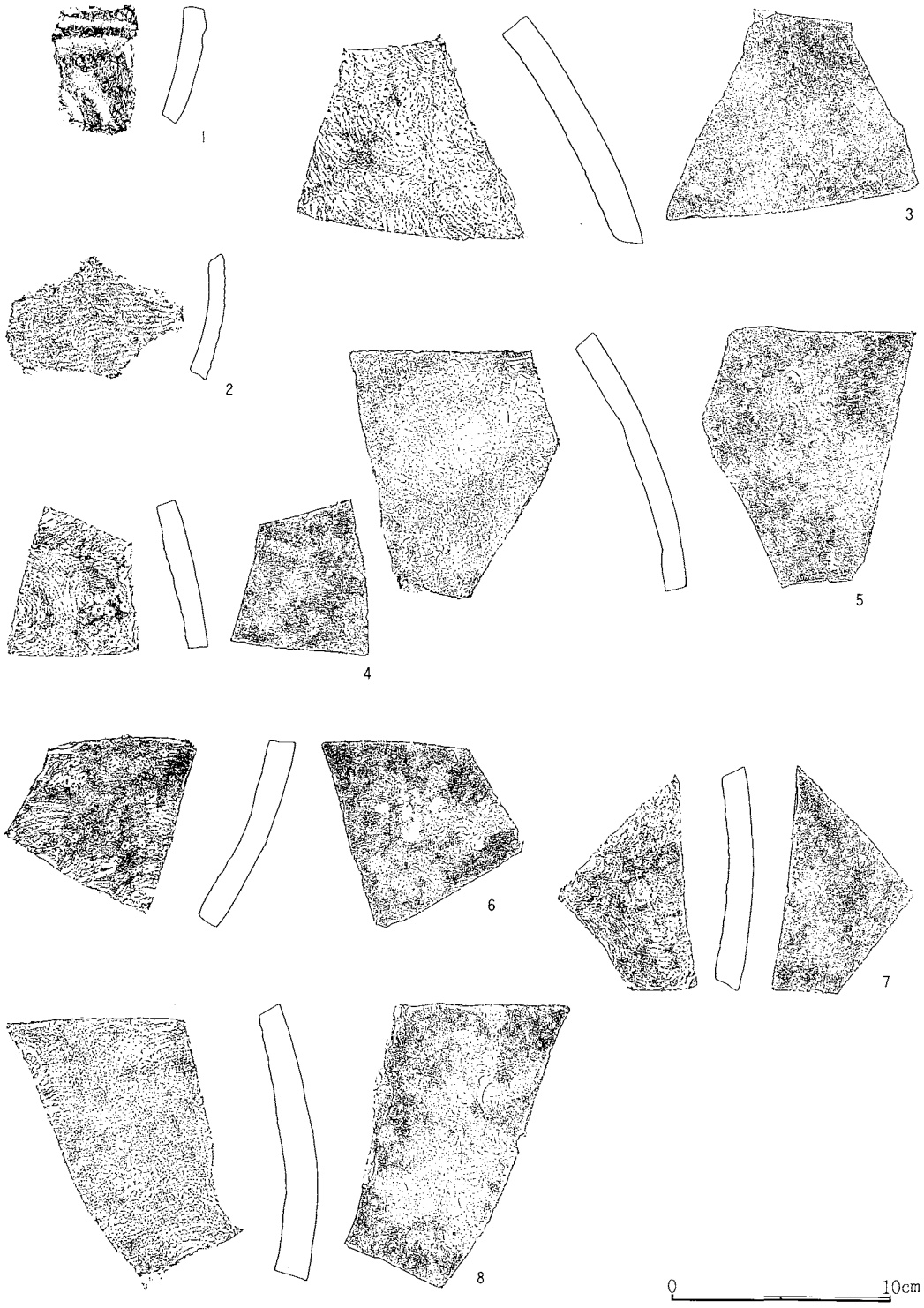
遺　物

袋状土壙の覆土中より縄文時代の土器が数点、須恵器の甕が数点、磨滅した埴輪片が数点出土した。しかしいずれの遺物も覆土中層からの出土であり、この袋状土壙の時期を決定する様な遺物は出土しなかった。



	色　調	粘　性	しまり	混入物等
1．黒褐色土層		なし	なし	As－A多量
2．黒褐色土層	1より明るい	ややあり	ややあり	As－YP少量
3．暗黄褐色土層		ややあり	ややあり	As－YP、ロームブロック多量

第8図　B区全体図



第９図　Ｂ区出土の遺物

No.	器　種	部　位	文　　様　　等	胎　　土	焼　成	色　調	時　　期
1	深　鉢	胴　部	地文に単節斜縄文が施され、半截竹管による平行沈線が横位に配される。	砂粒	あまり良くない	褐色	縄文中期 加曽利E式
2	深　鉢	胴　部	単節の斜縄文が全面に施される。	繊維、砂粒	あまり良くない	褐色	縄文前期 黒浜式

No.	器　種	調　　整　　技　　法	胎　　土	色　調	残　　存	備　考
1	須恵器 甕	外面：胴部回転横ナデ。 内面：胴部同心円状のタタキ目。	緻密	灰色 灰褐色	胴部一部	
2	須恵器 甕	外面：胴部回転横ナデ。 内面：胴部同心円状のタタキ目。	緻密	灰色 灰褐色	胴部一部	
3	須恵器 甕	外面：胴部回転横ナデ。 内面：胴部同心円状のタタキ目。	細砂粒を少量含む	灰色 灰褐色	胴部一部	
4	須恵器 甕	外面：胴部回転横ナデ。 内面：胴部同心円状のタタキ目。	緻密	灰色 灰褐色	胴部一部	
5	須恵器 甕	外面：胴部回転横ナデ。 内面：胴部同心円状のタタキ目。	細砂粒を少量含む	灰色 灰褐色	胴部一部	
6	須恵器 甕	外面：胴部回転横ナデ。 内面：胴部同心円状のタタキ目。	緻密	灰色 灰褐色	胴部一部	

第2表　B区遺物観察表

Ⅵ　ま　と　め

今回の調査は面積的にも少なく、調査中に壁が崩壊する事故があり遺構を完掘することができない等の問題点が多かったが、安中城の構造についていくつかの新しいことがわかった。

Ａ区の調査により、今まで安中城の西門部分に堀が存在するかどうかはっきりしていなかったが、今回のこの調査により堀があること、また堀をある時期に一気に埋め戻して石積みの水路を作っていることが確認された。しかし、堀にしても、石積みの水路にしても、これらの遺構が作られた時期を示す遺物が出土しなかったため、はっきりとした時期を示すことはできなかった。しかし安中城に関係している遺構であることは間違いないことから、堀は永禄２年安中越前守忠政の築城の時のもの、石積みの水路は江戸時代になってから、陣屋構えに再興されてからのものと考えてよいと思われる。

Ｂ区の袋状土壙、ピットに関しては、先に記したように、これらの遺構が属する時期及び遺構の性格に関しては不明である。

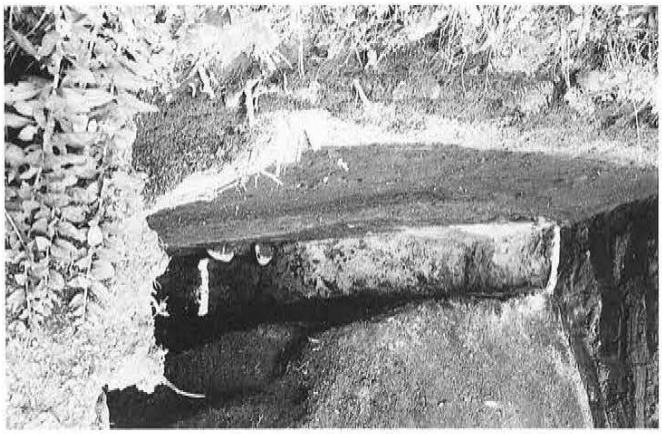
写　真　図　版

調査区遠景（矢印部分が遺跡）

調査区遠景安中大橋より（矢印部分が遺跡）

図版－2

A 区 全 景

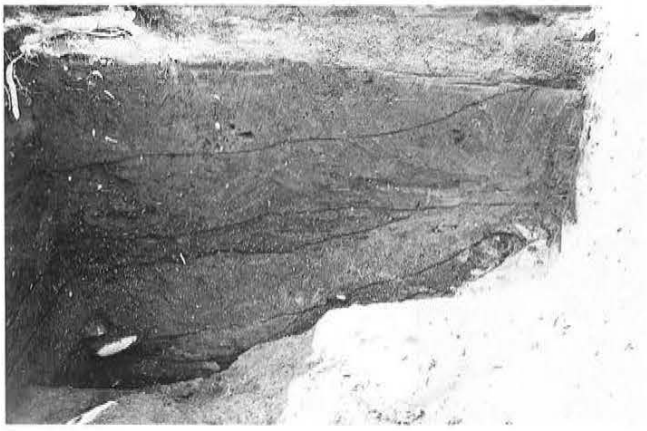


A区北端トレンチ、堀出土状態

A区中央トレンチ、掘出土状態

A区南端トレンチ、掘出土状態

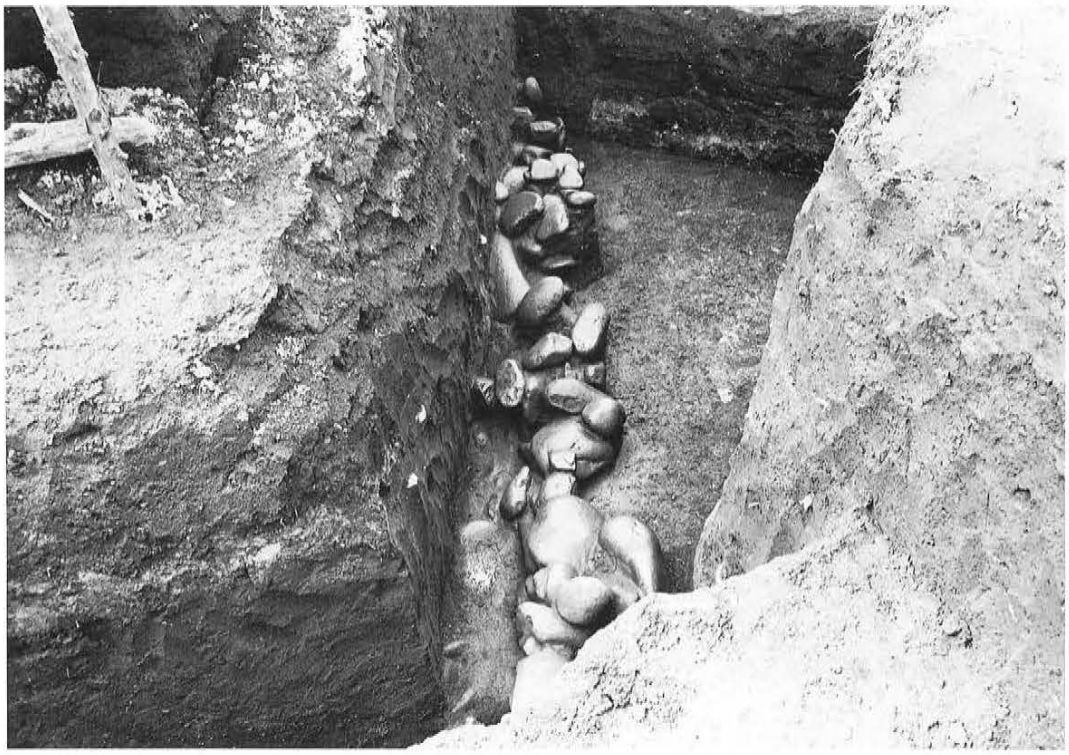
図版－4



A区北端トレンチ土層断面

A区中央トレンチ土層断面

A区南端トレンチ土層断面

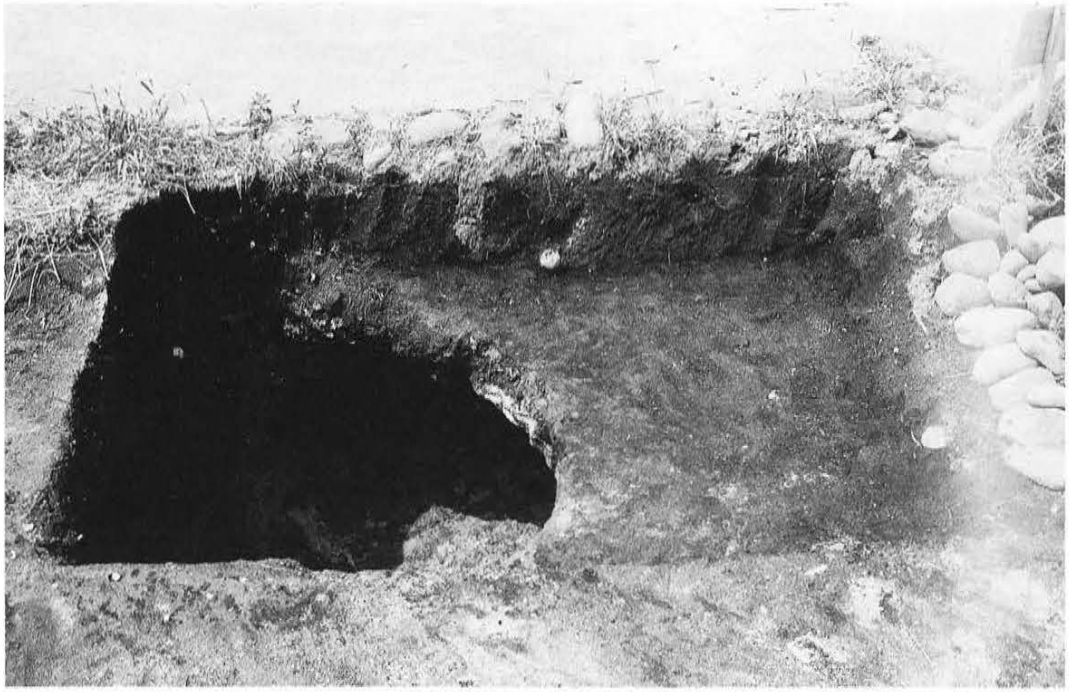


石垣積み水路全景

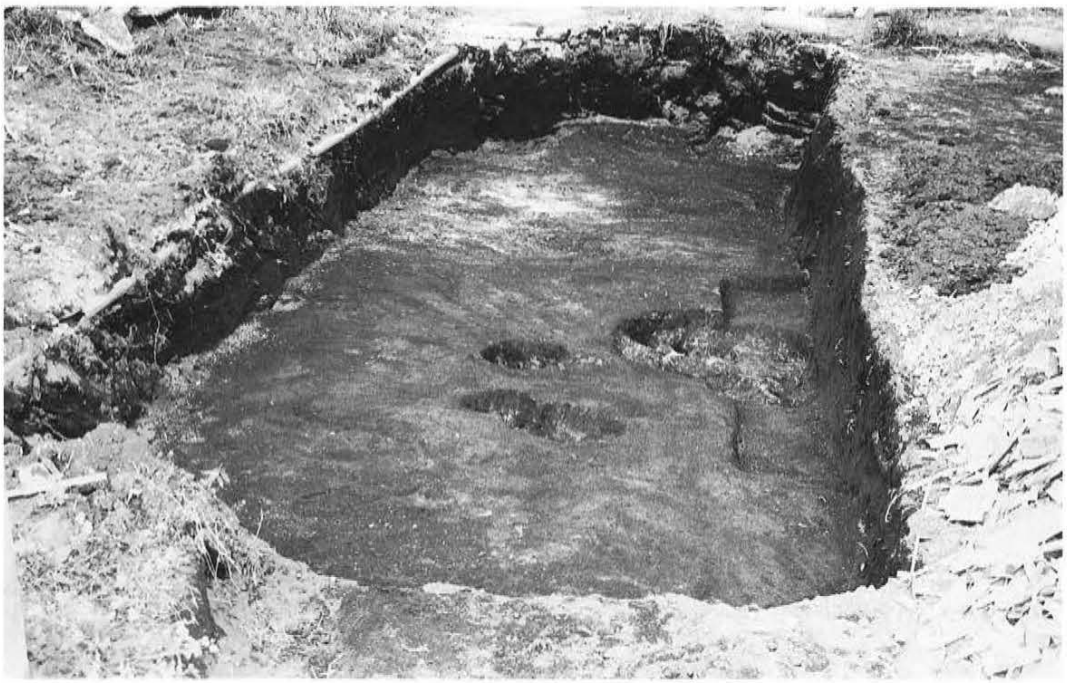
石垣積み水路

調 査 風 景

図版－6



B区西側全景（袋状土壙）



B区東側全景（ピット）

西町・谷津遺跡

—都市計画街路下の尻・茶屋町線取付道路
建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発　行　日　平成2年3月31日

編集・発行　安中市教育委員会社会教育課
群馬県安中市建設部

印　　刷　朝日印刷工業株式会社